↑昭和29年当時の共栄小学校の新校舎

↑初代校長
成定　伴蔵　氏

共栄小学校 開校からの変遷

当時の共栄小学校の学区地域は、雄武川・当沸川・幌内川・パンケペンケオロピリカイ川・五十寒川を中心に肥沃な土地を利用して開墾の鍬（くわ）が降ろされ、畑作中心の営農活動が始まりました。

当時の子どもたちは雄武小学校へ通学をしていましたが、近くて4㎞、遠い人は8㎞以上を通学していたそうです。道路も整備されておらず、未開の原野を通るなど、通学が困難で欠席児童や就学できない人もいたそうです。

開拓が進展するにつれて地域の学校開設の要望が強まりました。明治42年、雄武川流域に広大な農場を経営していた田口源太郎氏が私財を投じ、地域住民の総力を挙げて40坪ほどの校舎、住宅を建築。一学級編成で30数人の児童を収容し、明治44年4月2日に共栄小学校の前身である「雄武尋常高等小学校付属雄武原野特別教授所」が開校しました。

当時は1年生から4年生までを収容しており、5年生以上の高学年は雄武小学校へ通学していました。

大正10年10月31日には、創立10周年記念式典が挙行されました。

大正12年に雄武威金山が着業し、男子従業員44人が入地。これに応じて「中雄武特別教授場」が開設されました。そして、中雄武特別教授場と、当時、中雄武神社のあたりにあった共栄小学校の間で通学区域が調整され、そのうえで校舎を移築することになりました。土地1町歩は富田藤之助氏が寄贈、木造平屋建58坪2合5勺の校舎が竣工し、同年12月23日に落成式が挙行されました。

大正14年、大正天皇のご成婚25年の銀婚を奉祝し、校庭周囲にカラ松1千株を植樹。この苗木寄贈者は武藤寅吉氏が単独で500株、遠藤登之助氏、池田一氏、松井清行氏、泉山嘉助氏、平山宗右エ門氏のほか5人によって500株だったそうです。そして同年3月、柏木熊蔵氏の寄贈による門柱が建てられました。

昭和16年4月1日、全国一律に施行された国民学校令によって「雄武国民学校付属雄武原野分教場」と改称されました。そして大戦後、全国の国民学校が学校教育法に基づく小学校に改められ、昭和22年4月30日に「雄武村立雄武原野小学校」へ昇格して独立。初代校長には、昭和16年から単級の共栄小学校に勤務し続けた成定伴蔵訓導が任命されました。

そして、昭和24年度からは、それまでの低学年生ばかりでなく、5・6年生も収容する二学級編成となりました。当時の職員構成は、校長以下2人と実技講師1人、計3人の編成でした。

昭和28年1月1日、学区の地区が行政上「共栄」と改正したことから、名称が現在の「雄武町立共栄小学校」へと改称されました。

昭和29年8月5日、新校舎の建設に着手し、12月19日、落成式を挙行しました。物置小屋（15坪）の建材については、旧校舎のものを使って建設することとし、PTA会員の労力奉仕で昭和30年5月に完成しました。

昭和37年10月25日、木造50坪の体育館の竣工と合わせて開校50周年記念式典が挙行されました。式典では、祝賀会、功労者表彰、記念植樹が行われ、校歌の制定、校章の発表なども同時に行われました。

校章は、第4代校長見附秀雄氏が考え、一般的に「小」と入れる字を「共栄」とし、背景は、酪農地帯の学区を象徴して牧草を表す三つ葉。そして、葉を結ぶ3本の柱と線は牧さくを意味しています。

↑共栄小学校校章

昭和63年11月10日、地域や保護者、町関係者の力添えによって現在の校舎の原型が新築され、平成元年2月10日、新校舎落成式・落成記念祝賀会が挙行されました。

平成9年から、ドングリから苗木を育てて、次代を担う少年にみどりに対する意識を醸成することを目的とした北海道の事業である「ふるさと森づくり体験事業（森っ子クラブ）」がスタートし、栄丘・共栄小学校で実施されました。

平成12年に「共栄小学校山村留学協議会」が設立され、翌年から「定住型山村留学募集」を開始。平成14年度に、2家庭・児童5人を受け入れ、令和3年度までに延べ8家庭・児童14人の受け入れがありました。

平成23年11月5日には、開校百周年記念式典ならびに祝賀会が挙行されました。

↑平成元年当時の共栄小学校の新校舎

共栄小学校校歌

作詞　千葉　伊太郎
作曲　三浦　浩

雄武の流れに　よりそいて
緑ゆたかに　拓きてし
いさおしのわざ　受けつぎて
たのしく通う　学びやの
あゝ　共栄に　ほまれあり

山ばと小ばと　よりそいて
声ほろほろと　鳴きかわす
むつみの心　はぐくみて
たのしく集う　学びやの
あゝ　共栄に　光りあり

よき師よき友　手をくみて
学びの道を　いそしみて
きょうのうれしさ　あすもまた
希望の花の　咲く日まで
あゝ　共栄に　栄あれ